

中村光夫全集

第四卷

# 中村光夫全集

第四卷

筑摩書房

中村光夫全集 第四卷

昭和四十六年十二月十五日発行

著者 中村光夫

発行者 竹之内静雄  
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所 筑摩書房  
東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一十九一

電話 東京 七六五一(代表)

振替 東京 四一一三

印刷 株式会社 精興社

製本 牧製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 1395 (製品) 72504 (出版社) 4604

第四卷目次

永井荷風

|                                     |     |
|-------------------------------------|-----|
| 序                                   | 5   |
| 「ひかげの花」                             | 22  |
| 荷風の青春                               | 41  |
| （荷風の青春、アメリカを中心に、フランスを中心に、<br>肉化と再生） |     |
| 「新橋夜話」                              | 102 |
| 近作について                              | 105 |
| 「来訪者」                               | 108 |
| 荷風と潤一郎                              | 114 |
| 荷風と白鳥                               | 125 |
| 狂気の文学者                              | 134 |
| 人と文学                                | 146 |

\*

|  |     |
|--|-----|
| ・荷風の思想と生涯……………                                 | 169 |
| ・永井荷風……………                                     | 178 |
| ・荷風とフランス……………                                  | 180 |
| ・谷崎潤一郎   |     |
| ・谷崎潤一郎論……………                                   | 189 |
| ・(第一部 神童・異端者の悲しみ、第二部 捨てられる迄・<br>饒太郎、第三部 痴人の愛)  |     |
| ・佐藤春夫  |     |
| ・佐藤春夫論……………                                    | 323 |
| ・(田園の憂鬱、都会の憂鬱、この三つのもの、青白い熱情、<br>「うぬぼれかがみ」に答へる) |     |
| ・佐藤春夫小論……………                                   | 452 |
| ・志賀直哉  |     |
| ・志賀直哉論……………                                    | 463 |
| ・(祖父直道、内村鑑三、暗夜行路、山科の記憶、邦子)                     |     |

|      |                 |     |
|------|-----------------|-----|
|      | 志賀直哉小論……………     | 602 |
|      | 感想……………         | 609 |
|      | 志賀直哉に学ぶもの……………  | 613 |
|      | 志賀直哉の文学と思想…………… | 615 |
| 解説   | ……………           | 619 |
| 三好行雄 | ……………           |     |
| 627  | ……………           |     |
| 619  | ……………           |     |
| 627  | ……………           |     |

作家論(二)





永井荷風



## 序

### 一

永井荷風氏は本名壮吉、明治十二年に東京小石川の金富町四十五番地で生まれました。金富町といふのは伝通院の近くですが、そのころは今なら世田ヶ谷の外れくらゐな寂しい郊外で、氏の生家の広い庭の一隅には狐が住んでゐたさうです。

氏の父親久一郎は尾張出身の官吏でしたが、一方では禾原と号してかなり名の聞えた漢詩人で、同郷の關係から森春濤の門に入り、その子槐南なども深い交際がありました。家は代々名古屋の近くで庄屋をつとめた豪農で、その先祖には、井上士朗門流の俳人としてかなり名の聞えた永井士前がゐりました。

また荷風氏の母は尾州藩明倫堂の督学で、明治十四年に東京学士会院会員に任ぜられた鷲津毅堂の娘です。毅堂は久一郎の経学の師でしたから、今で云へば大学の校長先生のお嬢さんを貰つた格で、荷風氏の父は抜群の秀才であり、また謹嚴な才子でもあつたのでせう。

かういふ風に漢学の造詣が深かつただけでなく、氏の父は明治四年に藩命によつてアメリカに留学し、帰朝後、文部省に奉職した当時のいはゆる新知識の官僚のひとりで、その生活ぶりなども一時はなかなかハイカラであつたやうです。

しかしこの「十畳の居間に椅子卓子を据ゑ、冬はストオブに石炭を焚き……役所より帰宅の後は洋服の上衣を脱ぎ海老茶色のスモーキングジャケットに着換へ、英国風の大きなパイプを啣へて読書して居」た「西洋崇拜家」の「洋癖」も要するに外形だけのもので、氏の父は明治時代の多くの紳士の例をもれず、家庭では厳しい我

儘な専制君主であつたやうで、幼年時代の氏にとつては愛情よりむしろ畏れをまじへた嫌悪の対象になることが多かつたらしく、この時代の思ひ出を綴つた小品「狐」（明治四十二年一月、中学世界）には、さうした氏の氣持がよく現はれてゐます。

明治といふ時代の性格をなす、外見的な西洋模倣、その裏に根強く生き延びる専制と武断の氣風などに対する氏の疑惑と反抗とはすでに少年時代の家庭の雰圍氣に対する或る本能的な反撥に芽ざしてゐることを判つきり示してくれる点で、この小品は氏の全作品を通じて注目すべき佳作です。

後年氏の文学の重要な一面をなした文明批評は、それが感覺的趣味的なものであるだけに、その種子はすべてこの短篇に氏が生々しく再現した幼い感受性の動きに含まれてゐるので、

「父にはどうして、風に吹え、雨に泣き、夜を包む老樹の姿が恐しくないのであらう。角張つた父の顔が時としては松の瘤よりも猶空恐しく思はれた事があつた」といふ氏の幼い疑惑と嫌悪とは、やがて「新婦朝者日記」の「同じ人間と生れて教育されるなら、温かい自然の性情を傷付けられないやうに、自分は如何なる不幸の家にでもよい。辨慶のやうな強い国の人たるよりは、自分は頭を打たれたら、打たれた痛さだけ遠慮なく泣ける様な国に生れたかつた。」といふ感慨に通じます。

父親は、氏にとつておそらく明治文明の、あるひは更に深く日本の自然と文化の象徴であつたので、この「松の瘤」のやうな、あるひは「辨慶」のやうな父親を或時は恐怖し、或時は嫌悪し、最後にこれに熱い「死後の愛情」を注ぐまで、氏の生涯の文学は、一面においては父に対する感情の変遷史とも見られます。

「人間が生涯で最初に闘ふ敵は父親と教師だ」と云つたスタンダールの言葉は或る点まで永井氏に妥当するので、父親を心底では愛し「父の恩」と影響を深く蒙りながら、しかもその父によつて代表される封建的な圧迫に対しては、自己の近代人たる自覚と良心を賭けて闘はなければならなかつたところに、氏が人生の第一歩から経験した深い苦しみがあつたのです。

エディプス・コンプレックスなどといふまでもなく、鋭敏で感情の強かつた少年時代の氏は、父親に対して反

撥を感じるだけそれだけ深く母を愛したやうです。

さきに述べたやうに氏の母は鷺津毅堂の娘で、いはば父親の弟子に片付いた形で、その父は明治政府になつてからも主として司法省でかなり重く用ゐられたやうですが、当時の道德の命ずるまま、氣むづかしい父親によく仕へた温良な賢夫人で、同じ被圧迫者である幼い荷風氏の同情と憐みの対象になると同時に、我國の家族制度と結婚の幸福についての疑惑の種子にもなつたやうです。（「あめりか物語」の「一月一日」はおそらくかうした氏の母の一面を写したものでせう。）

しかしその反面には儒者の娘であるにもかかはらず、出身がおそらく名古屋といふ土地柄のせるか、派手で遊芸好きなどころもあつたやうで、

「さほどに懇意でない人は必ず私の母をば姉であらうと訊いた位……実に若い人で……江戸の生れで大の芝居好き、長唄が上手で琴もよく弾きました。」（監獄著の裏）

と荷風氏も回想してゐます。そして、

「私は敢へて恋人ばかりではない。母親をも永久に若い美しい花やかな人を持つてゐたいのです。……私は母親といつまでもく、楽しく面白く華美（華美）一ぱいに暮したいのです。私は母の為めならば、如何な寒い日にも、竹屋の渡しを渡つて、江戸名物の桜餅を買つて来ませう。」（同右）

といふ氏の母に対する感情はほとんど恋愛に近いものでした。

或種の男は恋人のなかに母を求めますが、また逆に母のなかに恋人をしか求めぬ男もゐます。荷風氏はまさしく後者の典型で、氏が西洋からかへつたあと、「小さく萎びた見るかげもないお婆さんになつて仕舞」つた母親は、その後の氏の作品からは影をひそめてしまひます。

氏の芸術への嗜好も、この「若い」古風な母親に対する愛慕からおのづから目覚めたので、彼女は幼い氏にとつて「テーブルの上に白き布をかけ、家庭風の西洋料理を食しゐた」ハイカラな冷い良家の空氣のなかで、過去の華やかな都会生活と芸術の香りをつつましく身近に発散するミュージズでした。

「私は忘れません、母に連れられ、乳母に抱かれ、久松座、新富座、千歳座などの棧敷で、鰻飯の重詰を物珍しく食べた事、冬の日の置炬燵で、母が買集めた彦三や田之助の錦絵を繰り広げ、過ぎ去つた時代の芸術談を聞いた事。」(同右)

かうした芸術に身を委ねることは、おそらく氏にとつて母の懐に抱かれるやうな自然な情念の発露であつたので、それがおのづから父親に対する反抗の徹底といふ形になつたのは、止むを得ぬ成行でした。

二

「そもわが文士としての生涯は明治三十一年わが二十歳の秋、簾の月と題せし未定の草稿一篇を携へ、牛込矢来町なる広津柳浪先生の門を叩きし日より始まりしものと云ふべし。」(書かでの記)

と荷風氏自身回想してゐますが、このときから、明治三十六年の渡米まで約五年間は氏の作家としての第一期または胎生期と云へませう。

この時代の氏の作品はほとんどどれも習作の域を脱せず、氏が芸術家としての自己をまだ把握しなかつた時期であつたことを思はせませんが、しかしこの間の氏の生活はかなり興味あるもので、後に氏の制作の素材になつた事件も少なくないので、右に引いた氏の「書かでの記」などによつて簡単に触れて見ませう。

当時の氏はその若いひたむきな情熱を傾けて、氏の生れた山の手の良家の風習に反抗し、母親によつて眼を開かれた芸術の世界、美の国に、つまり江戸伝来の下町の生活とその華である演劇と花柳界に、意識的に踏み込んで行きました。つまり氏の父に対する反逆が、市井の蕩児になることに現はれた時代であつたと云へませう。

柳浪をはじめて訪ねた頃の氏は、前年に東京高師の附属中学校を卒業して、外国語学校支那語科の二年生でしたが、

「一ツ橋なる校舎に赴く日としては罕にして毎日飽かず諸処方々の芝居寄席を見歩きたまきか家に在れば小説俳句漢詩狂歌の戯に耽り両親の嘆きも物の数とはせざりけり。」(同右)

と氏も云つてゐます。

たんに芝居寄席を見てまはつただけでなく、このころの氏は「朝寝坊むらくといふ嘶家の弟子になつて一年あまり、毎夜市中諸処の寄席に通つてゐた」ので、そのあひだには氏が六十歳をすぎてから懐かしげに「雪の日」で回想してゐるやうな可憐な恋の挿話も生れました。

このころの彼の制作——或ひはむしろ習作——には明治三十二年から四年にかけて、「おぼろ夜」「薄衣」「夕せみ」「烟鬼」「闇の夜」「をさめ髪」「花ちる夜」「小夜千鳥」などがあります。しかしこれらはなかのあるものが柳浪と合作の名義で雑誌に発表されたのもわかる通り、いづれも柳浪の影響を強くうけた、といふより彼を下手に模倣した作品で、幾度か出た生前の荷風全集にもまつたく収められてゐないところを見ると、おそらく氏が自分の作品として読まれたくないものばかりと思はれます。

そのなかで多少注目に価するのは「烟鬼」で、これは氏が中学を卒業した年(明治三十年)に、官を退いて郵船会社に入った父に伴はれて上海に遊んだときの見聞を材料にしたものやうですが、上海を舞台として阿片中毒患者の悲惨な末路を描いたもので、氏の異国趣味と人生の暗黒な頹廢面に対する異常な関心の現はれと云へませう。しかしそれは後から考へての話で、当時の人々からはただ題材だけが風変わりな幼稚な作品としかみられなかつたので、これはある懸賞小説の番外に当選したのですが、選者のひとりであつた幸田露伴は「つかまへたる題目は新しい四十五点」と評したさうです。

それよりも氏の将来の運命に大きな影響を与へたのはこの「烟鬼」が「新小説」一月号に発表された明治三十三年の六月に、二十二歳の氏が「芝居道実地の修業」を志して、福地桜痴の門下に入り、狂言作者見習として歌舞伎座へ勤めるやうになつたことで、それから翌年五月に、やはり桜痴にしたがつて歌舞伎座を退いて、「やまと新聞」に入社するまで一年たらずの間の「作者見習」の生活は、氏の江戸芸術に対する心酔期の頂点をなすと同時に、おそらく氏自身にとつても思ひがけなかつた新しい転回の機縁をなすものでした。

江戸芸術のといふより江戸といふ都会生活の中心をなして来た歌舞伎は、そのころやがて死歿した団十郎と菊五郎の人氣に最後の華を咲かせてゐたときでした。そこに本式に請書を出して入座した荷風氏の「墮落」も、家にかくれて寄席の前座をつとめてゐた頃とちがつてすつかり本格になつたわけです。

封建的な家庭の空氣を嫌悪した氏が何故見方によつては、さらに古い因襲の世界である歌舞伎のなかにとびこんだかといふことは、ちよつと考へると理解しがたいやうですが、明治の文明を「封建制度の美点を除いて、その悪弊のみ残した」と見る氏は、他に行き場所もないままに、せめてその「悪弊」が甚だしくともその「美点」の比較的保たれてゐる世界に「流竄の樂土」を求めようとしたので、このおそらく外部から見れば遊蕩児の氣紛れとしか見えない行為が、氏の心の内面では純一な思考の論理に徹する道であつたので、このやうないはば逆説的倫理家の面貌は、氏の生涯を貫く大きな特色と云へませう。

當時の狂言作者の位置は対社会的にも、また劇場の内部でもはなはだ低いもので、ことにその見習となれば「一日の興行済むまでは敵冬も羽織を着ず部屋にても巻簾を遠慮し作者部屋へ座元もしくは來客の方々見ゆれば叮嚀に茶を汲みて出し其の草履を揃へ」といふ風にまるで給仕代りに使はれたのですが、荷風は最初桜痴から与へられた客分の待遇を辞退して、「旦那芸は却て甚しき耻辱なれば何卒樂屋古來の慣例に従ひ寸毫の遠慮なく使役せられん事を請」ひ、來客の草履を直したり、立作者の羽織を畳み食事の給仕をするといふやうな労役に進んで服したので、これは氏の芸道への熱意の現はれといふより一種の変装趣味に近いものがあつたやうです。昔風に云へば「やつし」の嗜好です。

おそらく當時の氏の理想は道樂で身を過り、その墮ちて行つた境遇に、道樂氣を失はずに安住することであつたので、漢學者の血をひく良家のお坊ちゃんか、かういふ辛い屈辱に堪へたばかりでなく、それに或る愛着さへ覚えたのは、ともかく「好きな道」のために苦勞するのだといふ一種の英雄心とともに、自分を自分の手で不当に虐むといふ意識から來る自卑の満足感とも言ふべきものに支へられたためでせう。

「つまり最初に己れと云ふものを出来るだけ卑しくして、然る後、一種超越した態度に立つて局外者を眺めて見



ると、何につけ自然と巧まらずして冷な笑ひが口の端に浮んで来るものである。」と「冷笑」の中谷は云つてゐますが、この「一種超越した態度」の眼は単に他人ばかりでなく氏自身をも眺めてゐたので、自分の正体を知らぬ来客などに丁寧な茶を勧める自分の姿を、わきから傍観する氏の精神はそこに何か隠れんぼ遊びに似た興味をさへ覚えたこととせう。

荷風氏は己れの好むところを貫くためには世間態にかまはず身をおとすことは平気な人であつたらしく、後にも「渡仏の旅費を稼がうため」ワシントンの日本公使館に小使として雇はれたこともあり、その恋の日記には「余は娼家の奴僕となるも何の耻づる処かあらん」と誌したこともありませう。

しかし一方で氏はさほど必要もないのに、身をやつして、韜晦と変装とを娛しむ性癖もなかなか強かつたので、氏の晩年の傑作「濯東綺譚」はいはば変装文学であり、戦後の氏の生活などには殊に強くそれが現はれてゐると思はれます。

歌舞伎座の楽屋で「作者見習」として暮した一年間は氏にかうした韜晦の苦がい楽しみの味を最初に教へた貴重な体験であると思はれます。

更にこの楽屋生活の副産物として特記すべきことは、氏が桜痴やことにその執事であつた榎本破笠を通じてフランスの劇や文学について多くの知識を得たことです。桜痴は幕臣として維新前にすでに渡欧し、岩倉使節にもまた随行した、もつとも早いヨーロッパ通のひとりであり、つねにパリの本場の芝居を見て来たことを自慢にしてゐたくらゐるで、文学書などもかなり持つてゐたらしく、荷風氏がゾラの話をはじめてきたのも桜痴からであり、ゾラの小説は榎本破笠から借りて読んだのださうです。

つまり歌舞伎といふ古い因襲の世界の底に、案外な新しいヨーロッパ思潮との接触の端緒をつかんだので、このゾラはやがて氏の運命を大きく変へて行く梃の役目を果しました。